

「その根拠は？」

出エジプト記 7:8-13（新共同訳）

I 導入部

- みなさん、おはようございます。最初にお祈りをします。
- みなさんにお祈りいただき、昨日無事に韓国のチェジュ島から帰ってまいりました。
- 月曜日から金曜日までは、東アジアの若いクリスチャンリーダーが集まる大会に参加してきましたのですが、まず申し上げたいのは、食事がめちゃくちゃ美味しかったということです。
- 韓国の定番とも言えるチキンやミルクかき氷はもちろん、今回はチェジュ島ということで、海鮮が有名なんですね。大会の後に韓国の KGG の関係の方がご馳走してくださったのですが、アワビやウニ、焼き魚、イカの入ったチジミ、そしてチェジュは黒豚も有名らしく、黒豚の焼き肉や煮物を野菜でくるんで食べたり、野菜も美味しくて、もはや食い倒れツアーのようでしたが（笑）、
- あくまでもメインの目的は、東アジアのクリスチャンカンファレンス、キャンプで、昨今の東アジアの緊張状態のなかで、本当に愛に満ちた、お互いの国のために祈り合う時間などもあり、素晴らしい時間をもつことができました。
- 本日は、そこで受けた恵み、経験も分かち合いながら、聖書のことばに聞いていきたいと思えます。

II 本論部

一. 苦しみ

- 本日読まれた出エジプト記にはいろいろなテーマが詰まっています。そのなかの一つの大きなテーマが「苦しみ」です。僕の大好きなテーマですね（笑）「苦しみ」、それが出エジプト記の大切なテーマです。
- ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、イスラエルの人々は、エジプトという国で、なんと、430年に渡って奴隷とされていました。
- 差別され、苦しい重労働を強制され、またある時期からは、男の子の赤ちゃんは、取り上げられ、殺されることになっていました。想像を絶する苦しみを、彼らは経験していました。
- 私は去年の夏までアメリカにいて、そこで聞いたことですが、実は出エジプト記という書物は、アメリカの黒人奴隷たち、アフリカから連れて来られた人々が何度も読み、励ましを受けたと言われます。差別され、苦しめられ、軽んじられているすべての人が、この物語に自分を重ねることができます。
- 韓国で改めて考えさせられたことですが、現在でも、この日本のすぐ隣の北朝鮮では、信仰ゆえに捕らえられ、拷問を受け、殺されていっているクリスチャンがいます。
- 中国のクリスチャンたちは、もちろん以前に比べるとかなり自由がありますが、それでも政府のコントロール下に置かれていたり、あるいは大きい教会のなかには政府によって建物をつぶされたりしている教会もあるそうです。
- そのような迫害によっては、教会の拡大を止めることはできず、むしろますますクリスチャンが増えていっているそうですが、当然のことながら、それでも苦しみはあるでしょう。
- イスラエルの人々は、エジプトで、430年に渡って想像を絶する苦しみを経験していました。同じように、苦しみのなかにいる神の民が、クリスチャンたちが、今もこの世界にはいるわけです。

- 出エジプト記には、イスラエル人たちの苦しみ描かれています。イスラエルの民全体の苦しみ描かれる。そして、それに加えて、出エジプト記には、モーセという一人の人物の苦しみも描かれています。
- モーセというのは、旧約聖書に登場する有名人ですが、神さまが、苦しんでいるイスラエル人を解放するために、救い出すために、選ばれた人でした。
- しかし、これもご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、モーセは、神さまに、やりなさいと、あなたを選んだと言われたときに、こう言うのです。
- いやいやいやいや、私なんて無理ですよ。私は口下手なんです。人違いじゃないですか？他の人をどうぞ遣わしてください。
- このような反応の背景にあると思われるのは、「挫折経験」です。実は、モーセには、「挫折経験」があるんですね。昔、イスラエル人を救おうとして、エジプト人を殺してしまって、命を狙われ、恐れて逃げた経験があった。おそらく、それがトラウマみたいになっていた。みなさんも、少なからずトラウマみたいなものはあると思うんです（当然私もあります）。
- トラウマというのはその人の経験と結びついているので、他の人からはなかなか理解されません。多くの場合、トラウマがあると、新しく挑戦することに臆病になると言われています。失敗を恐れるゆえに、本来は失敗なんて全然していいのに、失敗をすることに強烈な恐れを抱かれさせるゆえに、使命を、責任を担うことから逃げさせる。それがトラウマであります。
- モーセは、それでも、神さまに説得をされて、一応命令に応答して、お兄さんのアロンと一緒に、勇気を出してエジプトの王、「ファラオ」と呼ばれていたのですが、ファラオのもとへ行って、「神の命令だ。イスラエルを解放せよ！」と言うんですね。
- でも、当然のことながら、ファラオは全然聞かない。むしろイスラエルの人々をもっと苦しめる。すると、イスラエルの人々の怒りはモーセとアロンに向かう。何を余計なことしてるんですか？と言われてしまう。
- そのようななかで、モーセは、神さまに言うんですね。神さま、どうしてこんなことになるのですか。全然救ってくれないじゃないですか。だから言ったじゃないですか。無理だって。そのように、疑いを、不平を抱き、苦しむモーセが描かれています。
- このように、「苦しみ」が、出エジプト記にはたくさん描かれています。みなさんは、いかがでしょうか。今、苦しみを経験しておられるでしょうか。モーセもそうでしたが、使命を、責任を担うというのは、しんどいことです。
- ある人は子育てという使命、勉強という使命、働くという使命、もちろん教会での奉仕、献金すること、祈ること、それらはどれも大切な使命ですが、せっかく使命を担おうと決意したのに、うまくいかない。神さまなんですか？って思うことだってあると思う。疲れ果てることだってあると思うんですね。
- 今回韓国で、たくさんの東アジアからの若い（若くない方もいましたが）クリスチャンリーダーたちに会いましたが、もちろんみんながみんなうまくいっているわけではありません。モーセのように挫折したり、人からの反対や、あるいは苦しむこと、死ぬことを恐れたり、神さまへの疑いを抱いてそれによって悩み、苦しんでいるという方も、もちろんいらっしゃいました。
- あなたはいかがでしょう。あなたには、どのような苦しみがあるのでしょうか。
- 今日は、今年度最後の日ですね。私は、年末にも一年を振り返るのですが、仕事上は3月で年度が終わるので、3/31にも、一年を振り返るのですが、ぜひみなさんも考えていただきたいんです。あなたは、どのような苦しみをこの一年間経験したのでしょうか。

## 二. 奇跡

- 苦しみのなかに行くと、疑いが湧いてきます。本当にこの方を信じていいのか。この方に信頼して、問題ないのか。これから先、どうなるのか。大丈夫だ！と神さまは言っている。そうになると、このような思いが湧いてくるのです。「その根拠は？」大丈夫だという根拠はどこにあるのか。7:9をご覧ください。

7:9 「もし、ファラオがあなたたちに向かって、『奇跡を行ってみよ』と求めるならば、あなたはアロンに、『杖を取って、ファラオの前に投げよ』と言うと、杖は蛇になる。」

- ファラオのもとに行って、改めて、「神の命令だ。イスラエルを解放せよ！」と言うとき、ファラオに「奇跡を行なってみよ」と言われるだろう。これは、別の訳では、「不思議」となっていますが、要するに、根拠はあるのかと。おまえが言う神は本当にいるのか、そんなに力があるのかと聞いているのです。
- 私たちも、何かを主張するときに根拠を聞かれることがあると思います。ここで、ファラオは、モーセの主張の根拠を尋ねたわけです。そしてファラオが求めた根拠こそが奇跡でした。
- 実は、この「奇跡」というのも、出エジプト記の大切なテーマでして、出エジプト記には、たくさんの奇跡が描かれています。
- 12章まで、10の奇跡が起こります。そしてその結果、イスラエルはエジプトから解放される。でも、エジプトの軍勢が、イスラエルを追って来る。そこでめっちゃ恐れるんですね。でも、これは14章ですが、有名な海を割るシーンもあって、いよいよ荒野に入っていくのですが、荒野には食べ物がない。そこでまた苦しむ。でも、神さまはマナという食べ物を与え、モーセがガーンって岩を叩いたら水が湧いたりする。そして、シナイ山という山の上で、神さまはイスラエルの民に十戒という十個の戒め、民を幸せにするための命令として律法を、口頭で与える。
- 出エジプト記には、このようにたくさんの奇跡、不思議な出来事が描かれています。みなさんにお聞きします。みなさんは、奇跡って見たいですか。奇跡を見てみたいですか？
- 有名な言葉に、「見ずに信じる幸いである」というイエスさまの言葉があります。
- イエスさまの弟子であるトマスという人が、イエスさまが十字架にかかった後に、復活したということを知って、俺は手の釘の穴に指を通すまで信じない！と言ったんですが、イエスさまがそのトマスに現れたときに言った言葉が、「見ずに信じる幸いである」という言葉でした。
- その意味では、トマスは、結局は見て信じたのです。トマスだけではなく、ペトロなど、他の弟子たちもそうでした。彼らは、「見て信じた人々」でした。
- 一方、出エジプト記が面白いのは、これはその後の民数記にも描かれているのですが、「見ても信じない人々」が描かれる。見ても信じない人々。
- 彼らはすごい奇跡をめっちゃ見るんですよ。例えば、エジプトの王ファラオは、奇跡をたくさん見る。なのに、絶対イスラエル人奴隷を解放しない！って言い張る。最後の最後で解放した後も、「やっぱりや〜めた！」となって追ってくる。
- モーセもそうです。神さまが、燃えてるのに燃え尽きない柴というすごい奇跡を見せても、いやいや僕には無理です！と、しつこいくらい言い続ける。
- イスラエルの人々もそうでした。何度奇跡を見ても、苦しいことがあると、エジプトが良かった、エジプトに帰りたい、奴隷に戻りたいとつぶやく。
- 奇跡を見ても信じない。イスラエルの人々の姿を見て分かるのは、人間は奇跡に慣れていくということです。人間というのは奇跡に慣れる。

- みなさんは「ありがとう」の反対の言葉は何だと思いますか？「ありがとう」の反対の言葉は何だと思いませんか。「ふざけんな」じゃないですよ。「ありがとう」の反対の言葉、それは「あたりまえ」です。「ありがとう」というのは、滅多にないこと、驚くべきことということです。「あたりまえ」というのは、あって当然のことです。
- さきほど私たちはこの一年間の苦しみを振り返りました。もう一つ、この一年間を振り返って、探して欲しいことがあります。
- この一年、あなたは、どんな奇跡を見たでしょうか？この一年、あなたに起こった奇跡は何でしょうか。この教会には、どんな奇跡が、どんな素晴らしいことが起こりましたか。
- それが根拠なのではないでしょうか。神さまが、良いお方であるということの、神さまが今もこの教会に、あなたに働いておられることのしるしなのではないか。
- でも、私たちは、すぐに忘れるんです。奇跡に慣れるんです。見ているのに、忘れる。見ているのに、信じなくなる。
- 韓国での大会中に、モンゴルからの牧師先生と話す時間がありました。ご存知の方もいらっしゃるかと思いますが、モンゴルは1992年に共産主義を放棄するまで、キリスト教は禁止されていました。現在では、なんと5万人のクリスチャンがモンゴルにはいて、宣教師を送るほどにもなっています。もちろん、さまざまな問題もあるということを知り、これからも祈っていきたいと思いましたが、それは奇跡です。
- 中国もそうです。長らく中国では過酷な迫害がなされてきました。教会はありましたが、妥協させられ、語ることでできる内容も制限されていました。しかし、1980年代前後から徐々に黙認に変わり、現在ではいたるところに大きな教会が作られ、たくさんの方がクリスチャンとなり、今では宣教師を送り出す国となっています。
- もちろん、最初に申し上げた通り、最近になって、また迫害やコントロールが強くなっていると言われますが、昔の中国の状況を考えると、今の状況は奇跡です。
- かつて、この日本の国でも大きな迫害がありました。私がアメリカの神学校にいたときに、教授に言われたことで、非常に印象に残っている言葉があるのですが、こういう風に言われたんですね。
- 日本では宣教が難しいとよく言われる。でも、当たり前だ。なぜなら、日本という国は、全世界で最も長く、かつ徹底的に、クリスチャンを攻撃し、迫害をした国だから。
- ローマ帝国の迫害は確かに厳しかったが、短期間だった。中国やソ連も、短いし、しかも一部の教会は残ることができた。日本は、200年以上、世界で最も長く、しかも一人のクリスチャンの存在も許さなかった。
- 明治以降も、神道が国教となるなかで、クリスチャンにたくさんのプレッシャーがかかったし、今だって決してクリスチャンが生きやすい社会じゃない。そのように考えるとき、日本にイエスさまを礼拝する神の民が存在しているということが、そして、あなたの存在が奇跡なんだ。そのように言うてくださって、ハッとしましたよね。
- あなたが救われて、クリスチャンとなったことは奇跡です。そしてあなたが今日も、この日本の地でイエスさまを信じ、この礼拝に来たということは奇跡である。
- そして、礼拝では奇跡が起こる。みなさん、出エジプト記における最大の奇跡はなんだと思いますか。過ぎ越しですか、海が割れたことですか。十戒が与えられたことですか。もちろん、それらは本当にすごい奇跡です。
- でも、もっとすごい奇跡、それは、モーセが変わったことです。最初あれほど恐れて、使命から逃げようとしていた、いや逃げたモーセが、恐れから解放されていく。もちろん完璧ではないんですね。この後も失敗もします。でも、確実に変えられていく。

- 神さまは、あなたを変えることができる。私も、変えられました。何度も言っていますが、私はこんなところで聖書の話をするような人じゃなかった。でも、神さまが私を変えてくださった。この一年もそうでした。これからもそうである。
- すでに起こっている奇跡に気づき、目を留めることができるかということが問われているのです。

### 三. 悪さえも善に

- 最後に、もう一つの奇跡に触れて終わりにしたいと思います。それは、私たちの目から見れば悪く見えることが良いものに変えられるという奇跡です。
- アロンの杖はへびに代わりました。実は、ここで使われているヘブル語は、普通の「へび」という単語ではなく、もちろんへびという意味もあるのですが、怪物・モンスターという意味もある言葉なんです。
- 聖書の中では、へびは悪やカオスの象徴とされている存在です。ここに書かれている通り、魔術師も、へびを出すんですね。でも、アロンのへびは、魔術師のへびを飲み込むのです。神さまは、へびすら用いるのです。
- 神さまは悪いものすら用いることができます。病や死は悪です。災害は、戦争は、迫害は、悪です。あるいは、あなたの罪は悪です。苦しみも、悪です。意味が分からないことが、私たちの人生には、あるいはこの世界には起こる。
- でも、主は、それらを、もっと良いことのために用いてくださる。すべてのことを、良きことに変えてくださる。
- 十字架だって、本来は悪です。モーセは、後に青銅の蛇を掲げる、民数記にそういうシーンがあるのですが、まさに十字架は、悪の象徴であり、罪と呪いと死を掲げることです。でも、神さまは、それを用いて、私たちの罪を赦してくださった。それは奇跡です。
- そして、イエスさまは悪と死に打ち勝って復活されました。それは奇跡です。
- そして、やがてイエスさまが再びこの世界に来られるとき、イエスさまと同じように私たちもやがて復活し、全ての苦しみから解放される。最後の奇跡が起こる。
- 聖書を読むときに気づかされるのは、詩篇や、預言書や、そしてイエスさまも、出エジプトの奇跡を何度も思い起こしているということです。
- 奇跡を、あえて思い起こし続けなければ、私たちはすぐにそれを忘れます。私も、一歩歩くと忘れるんですね。そして、どうなるかということ、神さまに頼ることをやめてしまう。祈ることをやめ、恐れ感ってしまう。
- でも、私たちは、この礼拝に集うとき、思い出すことができる。主の恵みを、主の奇跡を思い起こし、その根拠ゆえに主イエス・キリストを賛美して、私たちは今年度最後の礼拝を終え、新しい年度へと遣わされていきたいと思います。お祈りしましょう。